

記念

大正二年

御靈文樂座

四月興行



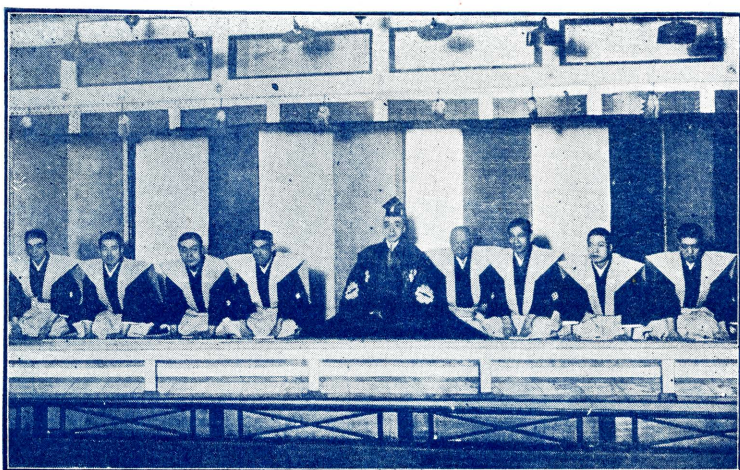
竹本攝津大椽
お名残り狂言

楠昔噺

並攝津大椽之略歴

此寫眞は
攝津大椽と
改名せし際の
記念撮影

仁丹本舖 寄贈



向て右々

竹本 越喜 太夫

竹本 叶 太夫

竹本 南部 太夫

竹本 むら 太夫

竹本 攝津大椽

竹本 越路 太夫

竹本 時 太夫

竹本 源 太夫

竹本 越見 太夫

此この寫しゃ眞しんは

お名な残ごり

挨拶あいさつの

光景こうけい



竹本 攝津大椽

(お名殘興行と其逸事) 大正二年四月誌

▼吾聲曲界の巨匠

竹本攝津大椽がわが藝壇に於ける地位は、此處に申上げるまでもなく、皆さまでも御承知のことですが、攝津大椽は、この四月興行をお名殘として、聲曲界を隱退します、併し相變らず文樂座の顧問として、後進の養成に、飽くまで力を注ぐことになりました。攝津大椽は本年(大正二年)

▼七十八歳の高齡

に達しまして、尙昔、盛りの俵を止め、靈妙なる藝術を以て、いよゝ聲曲界の珍重する所となり、當代第一人の名人として、每興行その手腕を發揮し、圓熟せる晩年の至藝にいつも酔はされたものですが、大椽は高齡のため、自己の藝術の、音量の減退や何かにより意に満たぬとして、豫てから、藝壇を隱退するの心を洩らして居たので、それが最負先や門弟等が今暫らくと頼みましたゝめ、今日まで兎に角踏み留まつたのです。

▼攝津大椽の經歷

を申し上げますと、天保七年三月十五日、大阪順慶町三丁目塗物問屋伊勢屋に生れ、父は森七三郎、母はお久といひ、大椽の幼名は吉太郎と呼ばれました。五



歳の時、釣鐘町上の町の大和屋事二見伊八の養子となり、名を龜次郎と改めました。この養父伊八が非常の淨瑠璃好きで、龜次郎はそれを見やう見真似、巧者に語るものですか。養父は得意となり、十一歳の時、三味線の稽古をさせました。それから漸く技倆の上るに随ひ、淨瑠璃を以て身を立てやうと決心し安政三年二十歳の時、初代越路太夫の子、三代目野澤吉兵衛の門人となつたのです。これが

▼淨瑠璃道へ入る

最初の階段で、門弟の龜次郎が天性の美音と、既に頭角を現はしてゐたその技倆に眼を著け、間もなく、安政五年龜次郎を紹介して、五代目竹本春太夫の弟子となし、春太夫は南部太夫と名乗らせました。それが二十二歳の時です。萬延元年、師匠吉兵衛は南部を連れて江戸興行に行き、南部を真打として、師匠自らその三味線を弾き南部はこの大役に益々研磨の功を積んで、江戸で

▼越路太夫と改名

しました。文久二年七月、恩師吉兵衛は江戸で客死し、越路は一時闇夜にともし火を失つた如く、愁傷落膽しましたが、心を勵まし、厚く葬りて、三味線野澤勝鳳と一緒に暫時江戸に止まりました。その時は、吉兵衛存生中に改名した住太夫の名で居ましたが、翌年六月、久し振りで故郷の大阪へ歸りますと、大阪にも住太夫があつた



ので、再び元の越路を名乗り、歸匠春太夫に依つて、京都の興行に加はり、「姫山姥」の御殿の段を語つたのです。攝津大椽の今日あるは、全く

▼吉兵衛と春太夫

のお陰で、只今でも大椽はその高恩を忘れず、二人の肖像を畫かせ

一室に掲げて、毎日文樂座へ出勤する前に、必らず二師を拜して出掛け、その教訓と指導との賜物を、厚く感佩して居るそうです。そして其の出世の端緒は、若い盛りの昔に遡つて思ひますと、慶應元年の事、初めて稻荷文樂座に出勤し、染太夫、湊太夫、實太夫、春太夫、咲太夫等當時の名人上手の間に介在して、時の狂言前「忠臣藏」に筑前太夫の（おかる道行）で越路はシテを勤め、これまでの興行に比べますと、可なり悪い役を引受けたのですが、咲太夫病氣のため一日勤めて欠勤し、越路は僥倖にも（松前）の前から引續いて

▼咲太夫の役場を勤め

尙筑前太夫欠席のため道行のシテに廻り、中頃から師匠春太夫

も亦、三日程欠席したので、越路は其の役場「野崎村」を勤め、此處に天稟の技倆を思ふさま發揮したのみならず、新顔の太夫として、非常の好評を博しました。これで面目を施こした越路は圖らずもこれが出世の絆となり、終に先輩を壓倒する勢ひとなりましたから師匠春太夫は素より、文樂座でも又なき青年と大切がり、越路も一層藝道を勵んだのであ



ります。間もなく維新の變動がありました。大阪市中も何となく物騒がしく、人形浄瑠璃も一時息抜きとして、京都その他へ移りましたから、越路は、鳴戸、筑後、春榮、越戸、三味線龍七、吉作、仙七等と一座を組織し、越路はその座頭で、明治元年十月上旬大阪を發し、九州の巡業に就きました。その巡業は翌年十月を以て打止めとし、久々に歸阪、十一月から再び文樂座に出勤し「高野山の段」を語りましたが、明治三年九月興行に「木下蔭狭間合戦」の（奥御殿）を勤めし以來。

▼昇進して切語りとなり

次第にその地位を揚げ、越路太夫の名は噴々として、聲曲界を風靡するの一勢力を作りました。すると明治四年正月、植村文樂家の代々經營し來つた大阪名物の稻荷文樂座は、松島へ移轉するととなり、越路も師匠春太夫と共に、それへ移つて初興行には「大徳寺焼香」を勤めたのです。時に越路は壯齡三十七歳でありました。當時先輩は如何にといふに、染、咲、湊等は、或は歿し或は退き、春太夫は高齡六十五歳で既に老境に傾き、第二流として僅かに寶太夫が、人氣を持続し居るも、他がさういふ有様であるから、實は聲曲界は唯一人越路太夫を有するのみで

▼其聲名双び揚り

人氣を其の双肩に荷ふこととなりました。次で越路は春太夫が文樂座



と少し事情があつて分離しましたから、自分だけ其處に踏み止まり、明治十年更に師匠と一つ舞臺を勤むるととなりましたけれども、春太夫は三月興行「阿波鳴門」を語ることに數日休業しその年七月二十五日不歸の客となりました。モウ聲曲界は越路の練熟せる手腕に俟たざるを得ず、其の盛名の四方に擴まるに伴れ、地方から出勤を申込む者、引きも切らず、明治二十年には、義太夫番附西の大關となつて、越路が諸方へ出稼ぎすることも、自然この前後が最も多く、到るところ大入りを取らざる事なくて越路の名は、實に九鼎大呂よりも重くなつたのです。これより先、明治十七年九月、現今の

▼御靈文樂座落成

し松島から移轉して、その初興行には「菅原」の通しに、三段目の後へ、開業式御祝儀の「壽式三番叟」を添へ、越路太夫、彌太夫、浪太夫、常子太夫（今の越路）時太夫、春榮太夫、路太夫、越代太夫、三味線は廣助、吉兵衛、綱造、勝市、丑之助吉鳳、人形は玉造、紋十郎、玉助、玉治といふ顔觸れで、二十四日より四十日間の興行に近年稀なる大當りを取りました、それから後、翌年六月三十日の大洪水が動機となり、越路は一座を率いて、第二の故郷たる江戸、それも夙に東京と變りたる帝都へ、二十年振りで乗込む事となり、十月四日を初日として、猿蓑町に新築せる文樂座で開場しましたが、



この時

▼帝都の大人氣

を一身に背負ひ二の替り三の替りを出して、興行日數五十日間口蓋惡なき江戸ッ子をして、終に口を緘せしむるに至りました。この上京に東京の各所を打ち十九年二月歸阪し、二十年一月再び上京して好評を博し、二十三年三月、更に三度目の上京を試みて、いよいよその非凡の技を揮ひ、一年間の滞京に興行を續くること前後二百十日間曾て一度もその盛名を毀くることなく錦を飾つて大阪へ戻つて來ました、藝術に飽くまで執着せる越路は、その修養を一日も怠らぬ如く、他の一言一句の注意に對しても能く咀嚼し、能く研究し、悟るところあれば、その言を容るゝに躊躇せず、圓満なる人格と、渾熟の域に達せるその技倆とは、畏くも故小松宮殿下の令聞に達し、明治二十三年十一月二十七日、即ち三度目の上京中に

▼芝高輪後藤伯邸

で殿下の御前に伺候し「二十四孝」の(謙信館)を御聞に入れましたのに、殿下にはいたく至藝を御賞美あり、この時から越路を御最負あそばされ、その後屢々御前に伺候して、お聞きに達してをりましたが、三十四年五月二十四日故殿下には御入洛あり、御旅館に宛て給へる川田氏別荘へ、越路はお禮として伺候せるに、偶御催しあ



りて村雲尼公、東本願寺法主、時の高崎京都府知事、同内貴市長及び大阪よりは、時の田村市長、故藤田傳三郎氏等を御招きあり、その餘興として、文字太夫(今の越路)の「荊葦」越路は「忠臣藏」山科の段を語り、大いに面目を施こしました。同年十二月十三日赤十字社大阪支部大會の際、殿下には總裁の御資格にて御來阪、平野町堺卯樓に御投宿遊ばされました時も、拜謁仰せ付けられ、越路は

▼御慰みに寺子屋

の松王首實験を語りました。また卅五年九月九日、越路が須磨の別荘に避暑中、京都河原町田中市兵衛氏の別荘から使ひを以て越路に來京を促がし、越路吉兵衛は上京して三味線なれば一旦御辭退申上げたるも、再度の使ひに黙止しがたく、同別荘へ伺候し、折柄成られたる、故小松宮、伏見宮兩殿下並びに村雲尼公の御前に於て、津太夫の「忠臣藏」山科の段、越路は殿下の御所望を畏み「二十四孝」の(謙信館)を令聞に達しました。がその時の三味線は猿糸が勤めました。同十日越路夫婦は、御旅館なる川田氏別荘で拜謁仰せ付けられました。がこの時

▼攝津大椽を受領

したのであります。されど當時殿下には、この御用意なく、假書を賜はり、十月三十一日、文字太夫と共に同じ御旅館へ推參し文字は「染分手綱」を、越路は



「河原達引」を語りて、お聴きに達し、改めてこの時、攝津大椽たるべき令旨の本紙ど、烏帽子及び素袍一着とを賜はり、越路は厚き思召しに感泣して御前を退下しましたが、其の令旨は

二見 金助事

淨瑠璃藝名 越路 大夫

夙に斯藝に熱心にして堪能の聞あるを以て御前に召させられ御難問の處深く御感賞ありせられ仍ては御室御所の古例も有之自今攝津大椽と稱すべき旨御沙汰候事

明治三十五年九月十日

小松宮家扶

とあります。この受領は昔から大切などで竹本義太夫の師井上播磨椽以來、義太夫節の正統を受けたもので、この受領あるは、攝津大椽まで、實に十名に過ぎないのであります。

▼古來の受領者は

即ち前記播磨椽に、義太夫の筑後椽、若太夫の越前少椽、二代目義

太夫の播磨椽、内匠太夫の大和椽、紋太夫の上總椽、美濃太夫の越前少椽、土佐太夫の播磨大椽、五代目染太夫の越前大椽等九名で、これに二代越路を加へ十名であります。

の内で大椽と稱したるは、土佐太夫の播磨大椽と染太夫の越前大椽と實に攝津大椽とあるばかりで、越路の光榮は勿論、聲曲家の名譽はこれがために幾段かの精彩を放つたのであ



ります。併し越路は、師匠春太夫の遺言により、六代目春太夫の名跡を襲ぐ事になつて居りましたから、亡師の遺志に背くは本意なしと、三十六年一月

▼一先づ春太夫と

改名し、門弟文字太夫をして、三代目越路太夫を襲はしめ、改名披

露を致しましたが、二月十八日、厚き恩寵を蒙りたる小松宮殿下薨去遊ばさるゝや、哀悼の心禁めがたく、四十七日間にして、この興行を千秋樂とし、三月興行の後、故殿下の思召しを拜し、既に亡師の遺言を空うせず、春太夫の名跡を襲いだる今日なればと、攝津大椽受領の準備に取蒐り、五月一日御靈文樂座で披露を致しました。狂言は「妹背山」大序より四段目までと「壺阪靈驗記」で、大椽は(山の段)の掛合に後室定高を勤め、それと(御殿の段)を語り、毎日非常の好人氣で七月十五日まで、日數七十五日間興行しました。この盛況は大椽の生涯中、空前の事に、満都の評判はたゞ御靈社文樂座の大椽に向かつて注がれたのであります。以上が攝津大椽受領までの略歴ですが、這回の隱退披露

▼名殘狂言楠昔噺

は明治十二年三月松島の文樂座で、初めて語り、當時同座に居

た五代目彌太夫が前の(どんぶりこ)を語つて、初日以來大入續きのため、六十五日間打續けたといふ、目出度いものであるが、引祝ひにこれを選んだのは大椽夫妻が相生の七十八



歳で、目出度く健かなる縁起を祝ひ、高仕の尉と姥にも似たる徳太夫々婦の人形が出る
 ころから思ひ付いたもので、この狂言は斯道の大物とて容易に手掛けるものなく、松島以
 來今度で三十五年振りだといふ事でありませう。ですから大椽もその節附には、非常の苦心
 を費したので、いろいろと名人が工風の跡を尋ね、老後の花を咲かせることになつたので
 が、古來攝津大椽の如く永年舞臺を勤めた人は、殆んど御座いませぬ。この藝壇の稀人が
 その巨腕を縦横に揮つて、最後の舞臺に華々しき武者振りを見せませう凛々しさを、ごう御
 覧なさいましたか。

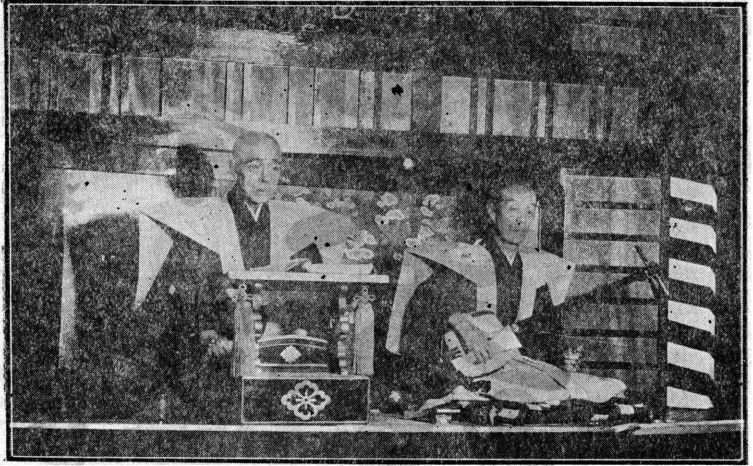


諸津大塚が名残りの墓

楠首塚

徳太夫佐助

記念の爲め採録す



今や攝津大椽が

左記

徳太夫住家の段

を語り出でんと

する瞬間の寫眞

糸は豊澤廣助



▼ 攝津大椽の語場

徳太夫仕家の段

はや夕陽に傾く頃、表へ美々しく女乗物、家來數多徒歩の者、先走りか門口より、誰そ頼まう、徳太夫殿お宅は是かと、尋ねに折好く婆は立出で、成程是々、何方様かと、云ふ聲聞いて乗物より、出づる女中の華やかさ、五ツ許りな娘つれ、家來を後に追戻し、静々入るを、婆は不思議と打眺め、此住侘た茅屋へ、結構なお姿で、何處からお出と饗應せばイヤ其様に忝しう御意遊ばす者でなし、定めてお前が徳太夫様の奥様でござりませう、ハ、ハ、ハ、御勿躰ない、つい鼻と仰やつて下さりませと、揉手をすれば此方も手をつき、私事は照葉と申しまして、徳太夫様のお子、竹五郎が女房でござりますると、聞いて手を打ち是は、サア、此方へまア此方へ、何から云はうぞ咄さうぞ、文來る度に戀な入筆逢ふたは初めて、心は互に嫁姑、竹五郎殿も變らず無事でござるか、成程息災で、常住お前のお文を見ては甚實の母様でも是程にはあるまいと、押戴いて居られます、此度天王寺の合戦、敵を一戦に追退け、士卒も歸さす主も逗留、勝軍とは申しながら、心元なく、是なる娘みどりを引つれ密の見舞、序なれども立寄つて勘當のお詫言、孫娘の顔も見せたら



父御様のお心も和かうし、又一ツには、此度天王寺での功名、宇都宮公綱と武名を顯し、
 楠を追散せしと申上なば、よもや勘當お赦しない事はあるまいと、勇みに勇んで参りし
 と、語れば婆は四邊を見廻し、コレ嫁女、親仁殿に逢ふたりとも、宇都宮といふ名は云ふ
 まいぞ、まして楠に勝つたと云ふたら、並大底の事じや有るまい、其譯密に咄して聞さ
 う、みごりをつれてまア奥へと、心有げな指齒には、厭と云れず氣も濟まねど、然らば左
 様に致さんと、娘を伴れて奥の間へ、はや入相の鐘の音も、胸に響きて老の身の思案取り
 ぐなる所へ、爺は一間を立出で、喃お婆、昨日川跡で諍論ふてから、お主も物云はず、
 俺も云はぬが、いかう氣詰り、些と咄す事もあり、何ともう仲を直ろかい、ヲ、おりや疾
 うから爾う思ふて居ます、したが、此方何ぞ聞きやせぬかや、イヤ何にも聞かぬが、わごり
 よは先刻に何ぞ聞いたか、イヤ俺も何にも聞かぬ、サ爾う云やるで咄し悪い、いつそ二人
 が胸の内、一度に咄そじやあるまいか、ヲこりや可からう、まア其咄しの發句は如何しや
 の、サア其發句といふはアノ昔々さる所に爺と婆と在つたといの、ホこりや珍しい咄しじ
 やわいの、大方其爺の息子に、勘當したのがあつたである、ヲあつた、其忤が出世して、
 宇都宮の公綱といふたげな、ムウそれ此方知つて居るか、そんなら俺も咄そ、其又婆の娘



の聲こゑに、楠くすのこ正ただ成なりといふのがあつたといひ、ヤア夫おれを其その方なたも知しつて居ゐるか、知しつて居ゐるく
 サア其その處ところが咄はなしか肝かん心じん勸かん文ぶん、其その勘かん當たうした悴せがれと、大たい切せつに思おもふ娘むすめの聲こゑと、劍つるぎを振ふり合あひ切きつゝは
 つゝ命いのちを果はたさんとするげな、其その親おやの身みになつての心こゝろ悲かなしいとも、情なさけないとも、胸むねを刃やいばで裂さ
 るゝ思おもひ、聲こゑを思おもふ父ちち親おやも、息むすこ子こを庇かば護まもふ母はは親おやも、思おもひは一いつツ斷だん末まつ魔ま、俱ともに悲かなしからうの
 ど、語かたれば婆ばばは泣なき出いだし、喃なん其その事こと思おもふて幾いく瀬せの案あんじ、義ぎ理りと義ぎ理りとに隔へだたれば、夫ふう婦ふ親おや子こ
 敵てき味み方かた、別わかれくにならうかと、夫おればつかりが悲かなしうござる、云いは、互たがひに意い趣しゆ遺い恨こんあつて
 軍いくさするでもなし、圓まるうするのおや親おやの慈じ悲ひ、思し案あんして見みて下くだされど、繩なづなり歎なげけ、ヲ、夫おれを
 思おもはぬでない、兎うさぎに角かく思おもひ廻ました上うへ、たつた一いつツの了れう簡けん、いふて見みよう聞きいてお見みやれ、
 見みれば最さい前ぜん、宇う都つ宮みやが娘むすめみごりとやらを伴つれて來きた、其その縁ゆかりと、聲こゑの正まさ成しげが子この千ち太たう郎らうとを
 夫ふう婦ふの縁えんを組くみ置おかば、子こに絆はだされる親おのれ心こゝろ、己おのれと和わ睦ぼくの筋すぢにもならうか、是これより外ほかの思し案あんは
 ないど、云いふに涙なみだの目めを押お拭ぬひ、面おも白しろい、厭いやと云いはぬ和わ睦ぼくのさし様やう、ヲ、嬉うれしや夫おれで
 落おち付ついた、スリヤ此この思し案あんが好よらうか、好よいともく上じやう分ぶん別べつ、善ぜんは急そげじや今いま爰こゝで、祝いはふて
 一いち寸すん盃はい事こと、ヲ、よからう、おりや千ち太たうを伴つれて來こう、其その方なたは縁ゆかりを、ヲ合あ點てんと、色いろも直なりて
 氣きも專いそみ、爺おやは勝か手てへ行ゆく程ほどに、婆ばばは一ま間まの方ほうへ行ゆき、縁ゆかり々々と呼よ出だせば、アいと答こたへて出で



て來るを、かたへに伸れて小聲になり、俺が云ふ事よう聞きや、女の子といふ者は、小
 い時から許嫁、殿御持たねば人が侮る、祖母が好い殿持そと、云含むる其内に、爺は千
 太に着初の社衾、吉野折敷に松と竹、徳利の口の引裂紙も、蝶花形の心にて、いそ／＼連
 出で座に直し、何と目出たいでないか、孫と孫とか一世一日の祝言、祝ふて立た松と竹、
 鶴龜は幟にあり、尉と姪は其方と俺、道具が揃ふた、祝ふて歌を、ヲ、小聲でたつた一口
 ヲツと心得扇を開き、七ツになる子がいたいいけな事云ふた、殿が欲しと歌ふた、ハ、ハ、ハ、
 是で祝儀は納つた、サア盃と取上させ、さゝんどする後より、照葉は見付けて走り出で、
 土器取つて打割れば、おとはも馳出で我子を取つて引退くる、翁媪ハツと氣の毒の、胸撫
 下すばかりなり、照葉は元より張強く、コレ申しお二人様、始終の様子は聞ましたが、よ
 う思ふても御覽じませ、夫公綱は六波羅方、楠殿は天皇方、敵と敵と、子供等を、祝言さ
 してはお上へ立たず、申悪いが此照葉も、長崎四郎左衛門が娘、逆足早い楠の子と、縁組
 んだと云れては、子孫までの家の名折、夫どもに親甲斐でなさる、事ならとても、事楠殿
 に降参させ、和睦あつた上の事と、聞くよりおとは、コレ照葉様とやら、降参とは何の
 事、退くも驅けるも軍の例ひ、天王寺の合戦に、配偶正成退いたるは、五千餘騎の軍勢を



追散した其跡へ、小勢で向ふ宇都宮天晴の武士、一面目興へてやるが武士の情と、わざと
 其場を退れました、逆足早いとはエ舌長など遣込むれば、イヤよい手な事仰やんな、情で
 軍に負ける法あるか聞かう、ヲ云をと、夫思ひの兩人が臂張懸ければ、爺は手を上げ、ヤ
 レ其争ひ聞くに及ばぬ、スリヤ如何あつても孫どもに、祝言さす事ならぬじやまで、アイ
 其儀は御免と、二人共詞揃へば、もう可い、喃婆、はや日も暮た看經しませう、佛壇
 へ御明し上げておくりやれ、ヲ、無明を拂ふ大燈明、胸の曇りを霽さうござれと、手を引
 合ふて翁媪は、一間へこそは入にけり、跡打眺め嫁娘、わけておとはは氣に懸り、コレ千
 太郎、其方は祖父様のお傍に附添ひ、何ぞ變つた事あらば、聲を上げて俺を呼びや、早う
 くと追やれば、照葉と娘引寄せて、其方は祖母様のお傍へ往て、随分御機嫌取りや、祝
 言の事御意あつても必ず合點せまいぞ、ありや内證から手を廻し、頼んだお方があつての
 事と、あてこすつて娘を奥へ遣る間も待たず、コレ照葉様、其頼人は誰が事、ヲ外ならず
 お前の事お、配偶の楠殿、負に負けてお身の上が氣遣ひさに、子供同士縁組せ、夫を囿に
 此軍、引いて貰をといふ、成らぬ事、天王寺に扣へた大軍勢は、心一致に身を堅め
 楠討たぬ其内は、假令唐天竺が一ツになつて攻めても動かぬ、逆げるやうな侍と、金鐵武



士は夫程に、違ひやんすとほのめかす、聞くにおとはは猶無念、とは云へ退いたは逃たなり、生中夫が武の情、今身の仇となつたかど、思へばくやしき口惜さ、齒の根を碎き身を顫ひ、悔み涙の折柄に、一間の内の小庭より、はつと燃立つ火焰は如何に、蛇の巻く如く合圖の狼煙、ひらりひらく上ると其儘、秋篠外山生駒山、火の手を合す遠箒、數千本の旗颺り、関をどつとぞ上にける、見るに悔り中にも照葉、是ぞ敵の隠し勢、味方の様子氣遣ひと、驅出すとおとは、飛付き引捉へ、唐天竺が攻懸けても、びくともせぬと、仰やつた、お口に似合はぬ何で氣遣ひ、楠が妻とはが留た、お邪魔致すと、弱腰をしつかと取れば、ホ、ホ、ホ、お殊勝しや何遊ばす、野山に育つて田がへしの、牛綱引くとはお當が違を宇都宮が女房照葉ならば留めて御覽せど、踏出す足は柳の枝、柳の腰に雪折は、ござんすまいと引いて行く、どつこい、お笑止や、殿御と合したお腹をば、瓢箪形に緊切るか、御運が好くば唐織の、二重廻りを引切るか、二ツに一ツは定の物と、引戻さばたち、たぢ神田の紅葉顔に散り、裾にちらつくばかりなり、斯る所へ公綱が、物見の者馬を飛して驅來り、ヤア、此家に宇都宮の御輿方や在する、天王寺に控へし五百騎の軍勢、今見にし遠箒に恐れ、みな散々に逃亡たり、主君の安否心元なし、急いでお歸りくと、云捨て



又引返す、南無三寶と驅出すを、猶も押へて競合ふ内、一間に切合ふ劍の音、はつと立
 つたる血煙に、二人はハツと胸騒ぎ争ひ捨て、走り寄る、墜子ぐらりと引明ければ、朱に
 染たる爺婆の、今を限りの其有様、こは何事を云上り、恚なり給ふぞ淺ましやと、縋り歎
 けば母親は、恥かしや嫁女娘、恚うなるまいと思ふから、孫と孫との取結び、和睦の罨を
 かけ損ひ、死ぬるわいのと一言が、照葉が身には猶徹へ、左程に思召すならば、配偶にも
 云聞せ、仕様もやうもあるべきに、お心早き御最期と、悔み涙に爺は起立ち、イヤ歎き遅
 い、其方が夫宇都宮は、取分我強き生れ付、此度の天王寺合戦、我武勇で勝つたと思
 ふは愚な事、天性敏き聲の正成、宇都宮は勘當の悴竹五郎といふ事よく知つて、一支へも
 支へず引退き、功名さしてくれたは此親へ、悦ばさんどの孝行と、思ひ當れび忝や、おど
 はよう禮云ふてたも、爾うども知らいで悴めは、五百騎の軍勢を天王寺に留め、楠を討た
 んど計る、せめては返禮に追退げんと思ふから、炭焼山籠りの衆を頼み、兼ては聲の力に
 もと、拵へ置たる遠箒、しらせを見せたら刈置いて薪柴に火をかけ、鯨波を揚げてたべと
 云合せは爰がと思ひ、幸ひ婆が洗濯の、布に仕懸ける合圖の狼煙、四方八方合す箒火、
 蒸立られて六波羅勢、皆ちり／＼に逃亡たは、我智恵の様なれども、日頃咄しに聞置けば



やつはり智の智恵なるがや、末世末代桶が、計略と云れん嬉しさ、是程の事にさへ聞怯す
 る宇都宮、正成を討たんと思ひも寄らず、叶はぬ事と思へども、勘當したれば異見もな
 らず、跡先思はぬ猪武者、向ふ度に恥辱を取り、犬死しをるを見るやうで、不惑におじや
 るど呢り上げ、歎けば婆も諸共に、隔てた私が義理あれば、狼煙を揚げて公綱に、恥辱を
 與へる事成らぬと、競合ふ劔の手が廻り、死ぬる悟といひながら、悲しい事をしました
 と、絶り歎けば、何のいの、おりや其方の刃物で、私も此方の劔を、無理に、是も前
 世の約束かと、泣惜るればおどはもせき上げ、武士といふ者は、親子兄弟引別れ、軍をす
 るも世の倣ひ、何故滞めては下さんせぬ、お前方の在る内は、公綱様へ我夫が、何の敵對
 致されましょ、お歎きは見せまいにと、悔めば苦き手を合せ、此方までが忝い、有やうは
 そのころまじり爲、二人の者は死まする、孝行深い桶殿、宇都宮が向ふと聞かば、勝誇つ
 た軍でも、引退くは定の事、さすれば一天君への不忠、其の不忠は此爺婆が、天照大神様
 へ敵するも同然、是までは智殿に、いかいお邪魔になりましたと、斷り云ふて下されど、
 云ふも涙聞くも涙、せめて末期に千太郎にも、お逢なされて下されと、呼に立つを婆は引
 留め、イヤもう孫には逢ませまい、馴染のない録でさへ、孫と名が附きや心が残る、まし



て千太郎は手汐に懸け育上たほんそ子、顔見る程迷ひの種、やつはり寝さして置いて下され、但し爺様は逢ふ心か、あのお婆の云やる事わいの、たゞさへ目の先にちらついで、おりやいひ出すも胸が裂けるやうな、おとは、随分大事に懸けて育てゝたもれや、ヤ、此秋から寺へも遣つて、いろは書いたら清書を佛壇へ供へてたも、夫が手向の香花、死ぬる覺悟の其中でも朝ぶさも焼いて置く、菖蒲刀も買ふて置いた、目が覺たらやつてたも、おいら二人を尋ねるなら、祖父は山へ柴刈に、祖母は川へ洗濯にと、云ふて賺してたもいのだわつと泣出す心根を、思ひ遣りつゝ嫁娘、かつはと伏して泣居たる、ハヤ臨終も近附けば照葉は涙の手を支へ、夫の我慢高慢も、先崩の名字引起さんとの心の刷み、今お果遊ばして、誰に勘當赦して貰はん、親御のお慈悲お情に、お赦しあつて給はれど、涙に沈むをつくく見て、傍に在合ふ石臼を、爰へとおとはに引寄せ、我血を以て石の面、了雲信士と書認し、一ツの石には妙三信女と記付けて、コレ是を見よ、都て此世に在る人の戒名は皆逆修、婆も俺も、生存へて居ると思ひ、何時でも心を改め、天皇方へ味方せば、其時此石塔に墨を入れよ、それが勘當赦した證、夫までは二親は、まづ此ごとく切合ふて、修羅の巷に迷ふて居ると、傳へてたも嫁ん女と、云ふが此世の暇乞、互に爺婆手を取合ひ、思



ひ合ふたる印には、命も息も一時に、縊へて果敢なくなりけり、二人に死骸に取付いて前後に暮れし折柄に、牛部屋より荷を擔げ、そろ／＼出づる以前の商人、扱も草臥れてぐつたりと一寐入やつて退けた、目覺しに何やらお笑止な事を聞まして、ア、思はずも貰ひ泣を致しました、ながうお悔みなされませと、悔みを云ふて出る所に、一間の内より高聲に宇都宮公綱待てと、呼はる聲は耳に胸突恟りして立留り、何じや、何の事、誰が事じやと行かんとす、ヤア卑怯なり公綱、楠多門兵衛止成對面せんと云ふ聲を、聞くより商人荷を投捨て上張取れば、肌には着鎧、頭巾の下には鎖鉢巻、荷籠に仕込みし弓矢携へ躍出でヤアいしくも留たり出来したり、我眼前に親の最期餘處に見るも、汝をば見出さん爲に耐へし不孝、只物臭きは此内と、思ふに遣はぬ我眼力、名乗つて出でしは天晴健康、見參の引出物胸腹射抜いて得させんと、弓弦をしめし待懸たり、ホヲ、潔し面白しと、一間の障子颯とけけば、床机に掛つて楠正成、黒革威の胸丸に、鍔形打つたる兜を着し、勢込んだる其形相、威あつて猛きにびくともせず、三人張に十三束引堅め、差詰引詰射るこそあれ鎧も兜もばらくと、落ちて姿は眞菰草、藁人形とぞなりにけり、南無三寶欺騙れしと、あせる此方に、ヤア／＼公綱、眼が見ぬか狼狽者、楠正成、是に在り、定めて矢種は盡



つらん笑止々々と、嘲り出づるを見るや否や、ヤア愚々、其術もあらうかど嗜み置いたる降矢二筋、受けて見よと云ふ儘に、切つて放せば過たず、鏝兜が一時に、落ちて同じく草の葉の、蓬つくねた人形に、二度悔りの無念の勢ひ、おとは、可笑く、コレお二人様、今日けふの祝儀の幟のぼりに添へ、幾つ拵へあらうも知れず、好い飾りの兜やど、嘲弄せられ夫知は地ぢ輔踏すけふ、死物狂しものあやひと驅行かきゆく回ふに、すつくと立つたる楠正成くすのまふしげ、公綱透きみつなすかさす弓取延ゆみとりべてはつしと打つ、可か躲ひしはつたと圓落けおし、くわつと睨ねたる眼の光り、元より猛まき宇都宮うつのみや、只一ただ欄らんみと驅寄かきよりしが、天性備てんせいでる正成まふしげが、勇氣ゆうきに思はず進すすみかね、五臟六腑ござうろくぷを揉も上げて、睨返ねらひかへし脾ひ戻もし、龍りゆうに羽はある勢いきほなせば、虎こに角つがひある勇氣ゆうきを現あらはし、互たがひにほつと吐つく息いきは、鯨くじらの汐吹しほふく如ごとくなり、二人の妻つまはあぶくと、手てに汗握あせぎるばかりにて、詮方せんかたもなく見わたる所に、正成まふしげ腎美しんびの聲こゑを聞きし、我天皇わがてんのうに頼たのまれ奉まり、命いのちを戦せいに抛なつ事こと、心こころあつて舅しゅうとに語かたらず、今宵こゝろ竊ひそかに傳たへんと裏道うらみちより歸かへりし所ところ、思おもはずも兩親りうしんの御最期ごさいご、急いそぎ御別おわかれと思へども、汝なんぢ此家このやに忍しのぶ事ことを知しつて故わざと扣ひかへし其心そのこゝろは、互たがひに激げしき戦たたかひ見みれば、御臨終ごりんじゆうの妨さまたげと、思おもひ計はかつて延引えんいんせり、諒闇れうあんは天子てんしに限からず庶人しよじんに及およぶ、眼がん前ぜん所親ところしんの期きの場ば處じよ、此場このばで直すくに勝負しやうぶも成なるまじ、時節じせつもあらんと云いはせも立たてず、ヤア生なま温ぬるこい一時ひとときを待またうか、女によ辰照葉しんせうはを入いり込こませ、



我わがは下げ賤せんに身みを扮はなすも、汝なんぢが首くびを見みやうばかり、其その處ところを引ひくなど云いふこそあれ、仕し込この槍やり
 を取とるより早はやく、無む二無む三さんに突つ懸かるを、持もつたる塵ちりにてはつしと匆はね、又また突つ懸かるを身みを躲か
 し、程ほど好よく掴つかみし金剛こんごう力りき、此こなた方は我が慢まんの高かう慢まん力りき、持もつたる腕うでとも引ひ抜ぬかんと、採も合あふ所ところに
 怪あやしやな、死したる父ちちの亡な骸がらが、むつくと起おきて槍やりの柄えを、中なかよりはつしと切き折りつて、佛ほとけ倒た
 しにどつさりと轉こけしは如何いかに、こは如何いかにと、四にん人びと一度いちどに顔かほ見み合あせ、不ふ思し議ぎの思おもひも魂こゝ
 魄ぼくの、此こゝろ世よを去まらぬ子こ故ゆゑの關かゝり、思おもひ續つけて人ひと々は、わつとばかりに泣なみ沈しづむ、二人ふたりの妻つまは
 涙なみだと俱ともに、夫むつとく々に取とり籠かり、四にち十九じゅう日にちが其その間あひだは、魂たまご其その家やを離はなれずと、聞ききしに違たがはぬ今いまの有あり
 様さま、お痛いたはしきは父ちち御ごのお心こゝろ、思おもひ計はかつて切きてまア、五にち十日じゅうの忌いみ明あきまで、勝せう負ふを待まつて下くだ
 さんせと、歎なげくも道だうり理りりと、流なが石がに猛たけき公きん綱つなも、元もとより仁じ義ぎの桶くも、睨にらみ合あふたる目めは
 涙なみだ、互たがひに待まつとも待またぬとも、云いはで別わかるゝ猛もう將じやう勇ゆう將じやう、妻つまは子こ供どもを呼よび出だして、死し骸がいに逢あは
 も片かた葉はの蘆あしの、便たより少すくな眞ま孤こ草くさ、菖蒲せうぶ勝せう負ふは時ときの運うん、粽ちまきは軍いくさの血ちま祭まつりと、思おもへば悲かなしき槍やり長なが
 刀なた、建たてし幟のぼりは大おほ旗はた小こ旗めい、冥めい途とへ靡なむ白しろ旗はたも、此この世よの名な残のこと正まさ成しげが、父ちちの死し骸がいを搔かき抱いだけ
 ば公きん綱つなも母は親りの死し骸がいを抱かへ是これまでの、義ぎ理りの情なさけの一いち禮れいに、兩れう將じやう並ならんで亡な骸がいを、押おし戴いたさし
 志こゝろざし、二人ふたりの妻つまは廻まわ向むか文ぶん、唱となふる聲こゑが鯨じやう波な、互たがひに戦せん場ば々々と詞ことばを殘のこし別わかれ行ゆく。(完)

一粒出し實寫圖



▲此最新扇形
このさいしんおうきかた

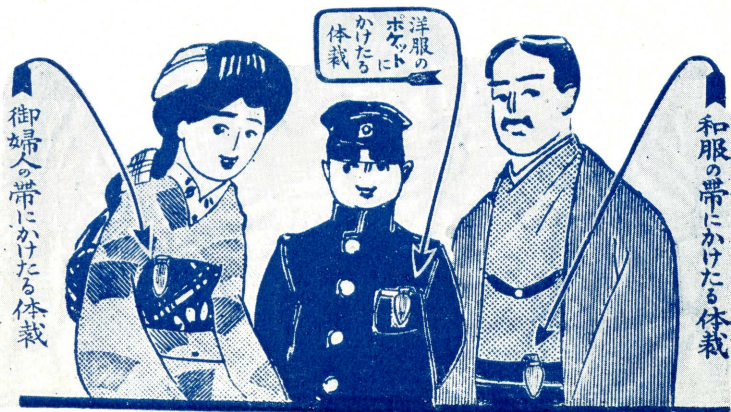
一粒出し鏡付容器は
りうだ かがみのかきようき

仁丹の十錢包の七倍分ある
にん せんづ、み せんと、み ばいぶん

五拾錢包に無代添付す
せんづ、み むだい、てんぶ

即刻御手にせられよ！
そつ、こく おて

◀圖の方帶携器容丹仁掲上▶





音聲をよくし 頭痛目眩を治し……
酒食の味を増して 氣分を爽かにす されば

観劇群集に行く時

一寸も 仁丹離れぬ



楠昔噺
端午節句